存在論的
英文法序説

大虎

目次

「存在論的英文法序説」

ｂｙ　大虎

目次

はじめに

言語の可能性について

言語の非生産性

言語の限界か限界の言語か？

かきことばの「はなしことば化」

英語の五つの文型について

第二文型

言語対貨幣？

存在論的英文法序説

There is構文について

物主語について

孤独について

（補）英文読解の実際

言語の可能性について

言語の非生産性

言語は社会的弱者である、といったらこれに異論のある人は多いと思います。暴力的、専制的な文脈で言語がつかわれたり、法律とか規律のように絶対的なものとして我々の前に立ちはだかったり、他人の欲望を煽動し利用してだまそうとしたりするとき、言語はある力をもって現れます。それにもかかわらず、僕は言語は弱者であるという比喩を使おうと思います。それは、言語は本質的に非生産的なものであるという意味で使ってます。つまり、「百の激励の言葉よりも一個のパンを」ということです。

力として現れる言語も、その背景にある権力から分離して考えれば、単に情報の伝達と交換の手段にすぎません。我々はその言葉をおそれるのでなく、その言葉を発する者をおそれるのです。「遺憾に思う」のが大臣であるか僕であるかは重大な違いです。「言語とは、単に空気の振動にすぎない」という洒落も一理あるわけです。

あるいは、現代は情報化社会といいますが、情報化社会というときの「情報」は、ある社会的あるいは経済的な尺度によって測られた情報をいいます。家庭内や隣組の情報をいくら握っていても、役にたつことは限られてますし、逆にどんな極秘情報も、公園を散歩するお年寄りには意味不明の記号にしかすぎません。

言語は、確かに力に仕え利用されます。だが、言語そのものには力はない。

また、けっして言語は現実に先行しません。必ず、現実に一歩遅れるのです。工場や田畑での生産、あるいは科学的発見がおこなわれたあとはじめて、それを交換、伝達する手段として言語は現れます。ＣＭや演説の時にも、まずあるイメージや概念があって、それを表現するのです。この言語の非生産性という弱さは、言語を扱う仕事の現場にいる人は時々実感していることだと思います。

ただし、この言語の非生産性ということは、言語の中立性を意味するものです。これが、権力に従属すると同時に権力に抵抗するものであるという、言語の二重性の原因ですが、このことについては後でもう一度問題にします。

言語の限界か、限界の言語か？

さて、ここでひとつ付け加えたいのは、この言語という、情報の伝達・交換手段の一つである道具は完全ではないということです。

「言語には限界がある。言葉ではいえないことがある」とは、日常よく耳にすることです。それはそのはず、言語は媒介者として間接的に伝達するのであり、我々の思ったようには動いてくれない選挙で選ばれた議員のようなものです。

この言語の不完全さを深刻に受け止め、言語の間接性ではなく、感性や身体の実感を重んじることを実践したり、それを端からみていて「理論化」する人もいますが、問題なのは、直接性も間接性と同じくらい疑わしいことです。また、一度でも外国に行ったことのある人なら、言語の限界という言葉は、言語の可能性としてとらえなおさねばならないことは容易にわかります。絵画、音楽、身振りでは伝達しきれないものを伝達する能力を、確かに言語は兼ね備えてます。外国で、片言の言葉でも通じればどれだけたすかるか・・・。

言語のないことを考えれば、自分の伝えたいことが、言葉をつくして１０％伝えられることは、限界でなく可能性としてとらえることは容易です。しかも、この１０％は誰にでも達成できるわけではない。ある文章家は、「死」とか「他人」とか「言語」とか、言葉で表現することが不可能な対象を表現していく限界の言語について語っています。修辞学は人を騙す方法にすぎないということはないようです。普段から意識的に言葉の訓練をすることは大切なことです。話は少し飛躍しますが、この言葉の扱い方を見失い、逆に言葉に振り回され、言語に閉じこめられたような状態にいるのが精神病者だ

という指摘もあり、言葉の使い方とは、決してあなどれないもののようです。

かきことばの「はなしことば化」

つぎに、言語による情報の伝達と交換を他の方法と比較するために、かきことばの「はなしことば化」、はなしことばの「音楽化、身振り化」というテーマの話をしようと思います。

大きくいえば、はなしことばの特徴は、交換性に優れ伝達性に劣り、かきことばの特徴は、伝達性に優れ交換性に劣るということになります。交換性がかきことばで劣るということは、ゆっくり読まないと、ときには何回読んでもわからない文章を思い浮かべれば理解できるでしょう。伝達性については、「なにを伝達するか」が問題になるのですが、とりあえず「概念」の伝達という点でかきことばが優れているとだけいっておきます。

はなしことばは、言葉そのものだけではなく、言葉の調子、リズム、高低、強弱や、身振り、表情、タイミングなども大きな役割をもってます。また言葉のもつイメージ（絵画性）もよく利用されます。とはいっても、はなしことばがいくら音楽化、身振り化、絵画化しても、音楽、ダンスや絵画が独自にもつ表現の豊かさにはかないませんが。

例えば、「やあ」という一言が、状況次第では I love you.よりも強い愛情表現になることもあり得るのです。「あっ」といって指を空にむければそれだけで、のんびりと二人で空を眺めているとき飛行機雲が見えたとか、突然 UFO が目の前を通ったとか、いちいち説明する必要はありません。毎朝のきまった「おはようございます」の一言も、お互いの間に、なんらかの次元の連帯もしくは断絶の空気を形成することができます。生産性どころか、事実の伝達性もない状況においてさえ、はなしことばは、人と人の間をつないだり壊したりする作用をもってます。

一方、かきことばは、確かに世論という人間関係の形成・破壊能力はありますし、文字の白黒のコントラストは絵画的効果ももちますが、一般に交換性は、紙や鉛筆、読むという行為に制限されてしまいます。事実の伝達ははなしことばでもよくできるので、事実の記録、「概念」の伝達がかきことばの特徴となります。次の章からは、かきことばを中心とする言語の伝達性についてさらに見ていこうと思いますが、最近の傾向として、かきことばの「はなしことば化」、はなしことばの「音楽化、身振り化」が進んでいる印象が僕にはありますが、みなさんはどう感じているでしょう？

英語の五つの文型について

英語の勉強をしていて驚きなのは、世界の多様な現象が、たった五つのパターンの文型で表現されてしまうということです。名詞や動詞・修飾語の多様性があるにせよ、人間の言語表現の方法は五つのパターンしかないということは、既にここに言語表現の限界が記されている気がします。

中学・高校時代に何度となくやらされた英語の構文分析。それを、言語表現の最終基本パターンという目で少し見直してみましょう。

あらかじめ、「There is+名詞」で存在を確認されたいくつもの名詞たちが、時間・空間をまたがって、その白い紙の上で動きまわっている「場」が英文テキストであると想像しましょう。

第一文型　S+V

まだその名詞は世界にひとりぼっちです。しかし、じっとしているのではなく、何かを始めました。

第二文型　S+V+C

この文型は、その名詞の、舞台での役割、自然的あるいは社会的

性質を記述するものです。

第三文型　S+V+O

その名詞は、他者あるいはある対象物に出会います。自分以外の損じが出現しました。名詞といっても、それは人とは限りません。ここでついでに触れておきたいのは、英語によくある「物主語」の合理性です。周囲の状況が自分に影響を与えている、と考えていることは、自分を冷静にみつめる第一歩です。日本語にはこういう発想が乏しい。自分の内省にかたよると、しばしば出口が見えなくなることがあります。もっとも、すべての原因を自分の外にしか求めないというのも問題ですが。

第四文型　S+V+O+O

その名詞とその相手（もしくは対象物）の間に第三のものがはいってきます。二者の関係も、直接的な関係だけでなく、何かを介した間接的な関係へ広がってきます。

第五文型　S+V+(S'(+V')+X')

現実の二重化がおこります。現実とは異なる、過去や未来、あるいは欲望、空想、理想、命令など、頭の中の世界が（　）内に示されたある文章によって提示されます。

特に、動詞の時制、修飾語句の変化により、ますますこの世界は複雑化していきます。筆者によってこの世界上に生命をうけた様々な名詞たちが、出会い、愛し、憎み、考え、喜び、怒り・・・・また出会う。それは、様々な時空にまたがる物語です。ただ彼らの世界は、テキストが終わると物語は終わり、白い紙が残るだけだが、我々の実際の世界は果てしなく続くところが違っています。楽しいことがあっても、事件が何もなくても・・・。

第二文型

ここで、他の表現にはない、特にかきことばによる伝達の特徴である「概念」の伝達について考えてみようと思います。僕自身、まだぼんやりとした形でしか理解してないのですが、この「概念」の伝達の際の鍵を握っているのが第二文型ではないかと考えてます。第二文型 S+V+C において、基本は、S=C です。これを以下、簡便に A=B といいかえて話をすすめます。

（１）科学的言語における A=B

ここで A は主語で、B は主語の属性を示します。この属性には、「重い」とか「赤い」とか「早い」とかの自然的属性だけでなく、「偉い」とか「金持ち」とか職業などの、社会的属性もあります。このとき注意すべきなのは、B は、多様な A の中の一側面だけを切り取っていることです。抽象化のはじまりです。灰皿の、色とかにおいとかタバコの灰捨て場という有用性とかは捨象されて、重さについての物理学が展開されます。A の性格、趣味、仕事、家族構成などは捨象されて、A の年収だけがとりあげられます。

数学における「数」とか、存在論における「存在」というものは、ある意味で、すべての主語がもつ属性を想定すてますから、もっと抽象性が高いといえるでしょう。

科学的言語では、多様な現実を抽象することで、現実に新しい光をあてようとします。この抽象化は、誰がいつみても、繰り返し再現可能なまで鍛えられます。

（２）隠喩的言語における A=B

隠喩は、特に文学的表現の中で、現実をいきいきと表現するために使われます。「たけしは月に向かって吠えた」というとき、本来は相異なる、たけしと狼がイコールで結ばれることで、例えば、たけしの孤独感、悲壮感の中にかいまみられる野生的強さが、狼と重な

って感じられます。このような隠喩的言語における A=B においては、現実の日常的な姿が揺らいで、より多様な、現実の新たな側面がうかびあがります。隠蔽されていたものの開示作用を隠喩はもってます。固定されているイメージの打破、という言い方も可能でしょう。

ただ、この隠喩における A=B において、A≠B の否定性（例では、たけし≠狼）は重要です。A≠B の否定性がうまく働かないと、隠喩は、逆に現実を隠蔽してしまうことになりかねません。例えば、多くの偏見の中には、この A≠B の否定性が働いてない A=B という表現がみられます。ですから、「イラン人は泥棒だ」という言い方は、つかまった泥棒の中にイラン人が混じっていたという事実を隠蔽してしまうことになります。隠喩的言語は、科学的言語のような再現可能性をもつどころか、繰り返し使われることで摩滅していくようです。

一般に、A=B に代表される、科学的言語や隠喩的言語は、直接に五感でしられる現実性とは異なる次元の現実を開示する作用をもつといえます。その際、科学的言語は上向きの、隠喩的言語は下向きのベクトルで作用している気が僕にはします。

現実っていったい何？　What is real？

言語対貨幣？

現代社会は、インターネットに象徴されるように、世界規模で情報が伝達・交換される時代になってきています。だが、実は、現代社会での情報の伝達・交換の手段の中のチャンピオンは言語ではなく貨幣です（インターネットは、パソコンの売買が前提となってます！）。貨幣が伝達するものは、商品価値に限られてますが、それは、多様な、商品という現実性と、価格の定量性という客観性に支えられています。貨幣の交換場所は、商品や銀行など（あるいは、最近ではインターネット上？）に限定されてますが、貨幣という世界言

語は、各国の言語や風習の壁をやすやすと乗り越えて、しばしば人間同士の交流のないところにさえ商品を送り込みます。世界のいたるところで、繰り返し。商品・貨幣の伝達・交換がおこなわれており、その空間的広がり、規模、スピードは言語の比ではありません。世界は緩やかに単一市場を形成しつつあるようです。この貨幣経済のもたらした確かな豊かさの中で、「革命」という言葉はもう遠くにしか聞こえません(せいぜい聞こえるのは「IT革命」くらいです！)。かわりに、残っているのは、経済格差という（解決可能な？）問題です。

言語は、権力に従属するように、この貨幣による伝達・交換が円滑に行われるのを助ける役割を果たしています。実際の商品の売買のかけひきの場面で、言語が重要な役目をはたすのはもちろん、「電子マネー」も言語による貨幣に対する援助の一形式といえるでしょう。

さらに特徴的なこととして、実際の商品売買とは無関係なところ（各メディア上、あるいは日常会話など）においてさえ、「消費欲望をかきたてる」イメージをねらった言語が好んで使用される傾向があるといえないでしょうか？商品の売買のかけひきの場面、CM、商品広告が「消費欲望をかきたてる」戦略をもつというのは当然のことです。しかし、注意して観察すれば、雑誌や新聞、そして日常の会話の中に、「消費欲望をかきたてる」イメージが数多く入り込んでいることに気づかないでしょうか？やや強引な例ですが、見知らぬ裸の美人を手にいれたいという衝動と、思いもしなかった素敵な商品を欲しいと思う気持ちには、類似するものがあるように僕には思えます。この類の欲望は、おそらく太古より人間のもっている欲望の一形式でしょう。しかし、現代社会において、欲望の中のある一形式が突出した形になっている・・・こういう分析は、量的な評価がむずかしいので単なる思弁にすぎないのかもしれませんが・・・。

さて、一方、言語は、その中立性をもつ限り、力に従属するだけではなく抵抗するという可能性をもっています。貨幣が問題になる

のは、それが「人間性」をも売買する可能性をもつことです。この、商品・貨幣による伝達・交換の世界と人間の間に生じる矛盾を、局所的に告発したり調整しているのは、やはり言語です。

もちろん、話は、貨幣対言語というような単純なものではありません。言語が従属にも抵抗にも働くように、貨幣にも（やはり、その中立性からくる）二面性があります。愛が売買されるのは困りますが、憎しみの売買は時に平和をもたらすこともあるからです。もし、憎悪の相互連鎖が、賠償という形で貨幣によりたちきれるなら、戦争や喧嘩はずっと減ることでしょうに・・・。

言語や貨幣はその中立性から、それを扱う方法で相異なるふるまいをします。そしてその扱いは人間の手、あるいは我々個人の手にゆだねられているのです。その意味で、我々一人一人が、言語や貨幣についてよく考えて判断せねばならない機会の多い時代に我々はいるといえましょう。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

最後に、話は少しそれますが、低迷する文学や詩などのかきことばに対して、ひとことエールを送りたいと思います。

これらは、交換性が乏しく、商品・貨幣交換の速度についていけません。また、その伝達するものが、「消費欲望をかきたてる」イメージをもつことが少ないどころか、そのようなイメージを壊すような作用をねらったものも中にはあるというのも低迷の理由にあげられましょう。

僕は、文学・詩の低迷が、単に商品・貨幣交換の世界からおちこぼれているというだけであるなら（要するに、もうからないということだけであるなら）、むしろ、この劣等生にこそ期待をよせられると考えます。もし、世界が単一市場へむかっていて、その外部の反対勢力が消滅しつつあるとしたら、この世界に対する抵抗は、その内部の、市場原理に乗れない場所からおこってくるはずだからです。

これは、かつての、資本主義対共産主義とか南北問題といった、地図上で色分け可能な平面的なものではなく、すかしてみなければ同じ色にしか見えないといった、立体的な対立構造をとると思われます。そのとき、科学的あるいは隠喩的言語といった、かきことばの、現実の別の次元を（あるいは隠蔽されていたものを）開示する作用は、その威力を発揮すると期待されます。

存在論的英文法序説

There is 構文について

存在とは何か？

このような非生産的な命題が気になる時期があるとすれば、それは若い頃でしょう。そして、たいていは、年月を重ね、実際に生きていくことで、ほとんどの人が、この問いについての言葉にならない回答を手にいれます。このような問いが気にならなくなることがその証拠です。

只、強いてもうひとつ、そんな時期をあげるとすれば、死を間近にひかえた時に。この問いがまた舞い戻ってくるのかもしれません。

「存在」という言葉の使い方自体がすでにやっかいです。

ある人は「be(と have)は存在詞」であるといいます。しかし、よく聞いてみれば、単に、be 動詞が主語の状態や場所をしめすことがあるという事実を指摘しているだけで、そのことを「存在」という言葉をつかって大げさにいう必要があるかという問題が残ります。

すなわち、存在詞としての be 動詞の例として、

I am in the room.

I am late for school.

があげられているのですが、これは第二文型の S+V+X の X に、名詞や形容詞がくるだけでなく、副詞がくる場合があるということです。これを、めずらしいと思うかどうかは、確かに構文の理解度にかかわってくると思います。しかし、このめずらしさを、存在詞と表現するか、主語の状態や場所を示すと表現するかは、その人の好みです。

存在するというのは、具体的な場所や状態とかかわるものではなく、抽象的な現実ばなれしたものだと僕は考えます。

存在するというのは、主語のある属性でもないと考えます。りんごにも人間にも机にも共通する属性として「存在する」という属性がある、という考えには僕は抵抗があります。存在とは、むしろ、数字に近いものではないかと考えます。

いずれにせよ、

There is X.

という表現には主語がありません。主語として X が現れる原初の形とでもいったらいいのでしょうか？There is X.で、X は世界にその姿をみせますが、まだ歩きだしていません。主語にはまだなっていない状態です。一方、第一から第五文型というのは、主語が前提になっています。その文にでてくる名詞たちがそこに「ある」ということは、暗黙の了解になっているのです。

要するに、この There is X.というのは、第一から第五文型のいずれにも分類できません。

しかし、この特殊な表現は、英語以外の言語にも一般的に存在しています。面白いのは、どの言語がどの動詞をえらんでいるかとい

うところです。

英語　There is X.　(be)
仏語　Il y a X.　(have)
独語　Es gibt X.　(give)
西語　(El) Hay X.　(make)

Xを(have)(give)(make)するのは非人称主語(it)なのですが、この(it)は、神かあるいはそれに相当するようなものともとらえられましょう。

存在 X に対し、それは神が(have)するものか(give)するものか(make)するのか、各国語で微妙に違うのは、お国柄とかかわっているのでしょうか？興味深いところです。そして、こう比較すると、英語の There is X.という表現は、神を連想させる (it)がない、単純な表現ともいえます。僕自身は、その単純さに、英語の魅力のひとつがみられると思っています。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

余談になりますが、英語を他国語と比べるときに、よく独語がひきあいにされますが、・・・語源とか言語学史とか難しい話はしりませんが・・・僕は、独語より仏語が英語により近いという印象をもっています。なぜなら、独語に比べて、仏語は英語の第一から第五文型と同じ文型をより厳密にまもっているからです。

ただ、仏語には、第六文型、又は、第三文型その二、とでもいえる次のような表現が存在します。

仏語　Je telephone a Stephane.・・・可
英語　I telephone to Stephane. ・・・可　（第一文型）

に対して、

仏語　Je lui telephone.・・・可　（第六文型）
英語　(I telephone him.)・・・不可

は仏語のみ許されます。すなわち、英語では、間接目的語が単独で目的語となる文章は許されない（I telephone him. He gives me.は不可）が、仏語では許されるのです。

なお、仏語の条件法は、英語の仮定法に相当します。仏語の接続法は、英語では should という助動詞でほとんど代用されてしまうので、英文法は仏文法よりずっと易しく感じられます。

この件について、専門家の方の意見をお聞かせねがえればと思います。

物主語について

物主語というのは、英語独特の表現で日本語にはなじまないといわれてます。

His attitude toward my mother made me sad.
(私は、彼の、母へ示した態度に、悲しくなった)

もし、この文章を、テストで「彼の、母へしめした態度は、私を悲しくさせた。」と訳したとすれば、それは減点の対象になるといわれます。訳が日本語らしくないという理由からです。

その採点法自体、僕には疑問なのですが、その（減点の対象となる）＜日本語らしくない表現＞を、むしろ積極的に普段からとりいれていくことを提唱しようと思います。＜物主語という発想は英語に独特＞という中性的な表現は僕には物足りなく感じられます。一

歩ですすんで、物主語という発想は、思考する際にとても大切なことで、もし日本人が苦手とする発想であるなら、訓練によってすすんで身につけていくべきだと考えます。

しばしば我々は、悲しくなった＜私＞に目がいき、悲しくなった原因を＜私＞の行動や内面に求めようとしがちです。そのような方法で問題が解決できる場合もあるでしょう。しかし、それはしばしば、問題の解決ではなく、現状に対する追認、＜解釈＞に終わってはいないでしょうか？本当に追いつめられたとき、自分の中で勝手に処理するだけではまにあわなくなったとき、我々は闘わなくてはなりません。そのとき、追いつめられた自分の感情を表現するだけで勝てるでしょうか？闘いに勝つには、相手をみつめ、分析し、戦略をたてねばなりません。その第一歩は、悲しくなった自分ではなく、悲しくさせた原因を＜物主語＞として意識することなのではないでしょうか・

悲しんでいる自分しかみてないうちは物事は止まったままです。また、その悲しみが、いよいよ現状を冷静に分析する目を曇らせてしまうかもしれない。悲しんでいる自分ではなく彼の態度が問題なのだと自覚することが、今のおかれている状況を打開する第一歩なのです。また、この自覚は、＜自分＞から一時離れることで、時に、重くすさんだ自分の心を軽くする＜癒やし＞の効果をもつ場合もあります。

おそらく、外国人は、逆に我々とは正反対の極端にはしりがちです。自分は一切かえりみず、His attitude toward my mother をもっぱら攻撃する。まずなによりも・・・私のせいではない。あなたが悪いのだ。周囲が悪いのだ。それはそれで問題なのですが、とかく自らをふりかえりたがる日本人にとっては、この物主語に責任をおしつけ攻撃するということは、大切な発想なのです。

This world sickenes me.

「むかつく」というのは、一時的な感情です。それは時とともに去り、this world も me も、反省されることなく、現状のまま続いていきます。

(I am) Sickened.・・・むかつく、だけでは不十分なのです。This world sickenes me.こういってはじめて、This world そして me も思考の対象にのぼってくるのです。This world とは何か？親か？先生か？政治家か？むかついている me とはなにものか？・・・そしてはじめて現状打破の一歩がはじまるのです。

今までの話には、一つの抽象的な前提が暗黙のうちにあります。あたりまえすぎて、普通の人には問題にならないことなのですが、世の中には、考えすぎて普通に考えられない人が少数います。そのような人と話すときは、基本的な前提を再確認しなければならないという手間がかかります。

それは、言語の外、自分の外の現実があるということを認める、ということです。そして、単なる記号のようにもみえる言語も、手で触ることのできない感情も、なにかしら外部の現実の反映である、ということを認めることです。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

物主語という発想が、殺人という行為につながるという批判を心配するのは、筆者の杞憂かもしれません。殺人の時、殺される人は、殺す人にとって＜物＞にほかなりませんが、他人を、冷静にみることと、＜物＞としてみることとは相異なります。

殺人（あるいは傷害）というのは、＜他殺＞の方法としては幼稚で単純なものです。だから１７才の少年でも思いつくのです。殺人者は、どんなにその計画性が巧みであっても、本人自身は幼稚なのです。

＜他殺＞の方法は、殺人や傷害以外に様々な方法があります。恨み、そして復讐の物語は、時に我々の共感をよびます。＜他殺＞について、善悪の尺度のみをもってすますことはできません。そして、他人に苦痛を最も与える方法が、殺人や傷害であるとは、僕には思えません。

幼稚で単純な方法だけあって、殺人を試みても、（様々な報道や教本とは裏腹に）人は容易には死にません。病魔におかされた人の生命力には胸うたれるものがあります。大量の睡眠薬服用後でも、ほとんどの場合、長い昏睡のあと何事もなかったかのように目覚めます。手首の動脈を切っても、血圧の低下とともに、ふきだす血の勢いはゆるまり、自然に止血されてしまいます。要するに、殺人をするためには、それなりの専門知識を要します。特に日本では、非力な人でもてっとりばやく殺人を成功させる道具である、銃や毒物の入手は困難で、実際にはなかなか使えません。

ただ、一番の問題は、容易でなくても、時に、この幼稚な＜他殺＞の方法が成立してしまうことがあるということです。

孤独について

孤独には二種類あると考えられます。

一つは、精神的苦痛に伴う孤独です。これは例えば「無に対する不安」（と、時に表現される）のような、内面からうまれる喜劇的な孤独です。もう一つは、肉体的苦痛に伴う孤独です。これは、病気、疲労、飢えなどの悲劇的な孤独です。

前者に対しては、もったいぶった態度をとることもできれば、笑ってすますこともできます。いわば、個人の感受性にまかされた、自由な孤独です。一方、後者は、そこから離脱することが不可能な孤独といえます。

そして、今回のテーマの＜孤独＞とは、前者であることを最初に

断っておきたいと思います。

我々は、孤独を、一人きりの時に感じるのでしょうか？人ごみのなかで感じるのでしょうか？それとも、学校や会社などの集団の中、あるいは、家庭や、夫婦・カップルといった親しい関係のなかで感じるのでしょうか？

He sees me.
I touch his hand.
He gives me some money.
I know the meaning.
I will make him happy.

これらの、第三、四、五文型のなかで表現されるように、我々は様々な人々や事物に取り囲まれて、それらと様々な関係をもっています。陳腐な言い方ですが、我々は決してひとりでは生きていない。無人島生活のように、ひとりで生活しているのではない。だから、少なくとも、それだけの意味では我々は孤独でないような気がする。しかし、それだけでは満たされない気もする。・・・「孤独」は、何枚ものヴェールに包まれていて、その姿が判然としては見えにくい。

少なくとも、人や事物と関係しているとき、我々は孤独ではありません。そのとき、＜私＞はその関係の中に一部が吸収されてしまって、孤独である自分そのものが見えにくくなっているようです。しかし、そのとき、孤独は忘れられているだけかもしれない。だから、それが終わると、又、やってくる・・・。

それでは、

I work.
I walk.

のような、他者のいない、第一文型的な単独行動の時、私は孤独でしょうか？

時に、人は悲しみを忘れるために働くといいます。人恋しくなって、ただやみくもに歩くこともあるかもしれません。あるいは、家で待つ妻子を想いながらつらい仕事をやりとげたり、山の頂上に立ったときの喜びのために黙々と山を登ったりします。

少なくとも、活動してるとき、我々は孤独ではありません。むしろ、自動詞的な行動の最中では、＜私＞はその行動に吸収されてしまって、孤独である自分そのものが消えてしまっている。しかし、そのとき、孤独は忘れられているだけかもしれない。だから、それが終わると、又、やってくる・・・。

孤独は、おそらく＜私＞と関わりがある。だからといって、

I am teacher.
I am tall.
I am sad.

といった、第二文型による、＜私＞についての分析や解釈によって、＜私＞が充分説明されたり、孤独が解消されたりするわけではない・・・。

おそらく、＜私＞が一時的になくなるような状況がおこると、孤独は消えたかのようにみえる。そして、我々のほとんどの時間は、＜私＞がたえず現れたり消えたりしてうつろっていく、孤独がみえない、もしくはみえにくい時間である。しかし、＜私＞は、他者や事物が傍らにあるという「一人でない」状況でも、自動詞的な行動でも、分析や解釈によっても、永遠に消すことはできない・・・。

＜私＞を永遠になくそうという夢が「自殺」という不可能な方法である。「自殺」が成立しているかのようにみえるのは、その夢から目覚めたときに、もうあともどりできなくなっていることがありうるからだ。具体的にいえば、肉体的苦痛により夢からさめたときには、もう、首にかかった縄がほどけなくなっていたり、身体にまわったガスや薬のために力がでずに助けを呼ぶことができない状況になっていることがあるため、「自殺」が可能だったかのようにみえるだけだ。＜私＞は消えるのでなく、後悔の中にその姿を大きく表すのだ・・・。

しかし、もうこれ以上、僕は思考の展開を皆さんにお見せすることはできません。孤独に対する分析は、まだ僕には荷が重すぎるようです。

でも、結論だけは知っているつもりです。

「孤独が悲劇的なものであるのは、それが他者の喪失であるからではなく、その自己同一性という拘束状態のうちにとじこめられているからである」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

その意味で、＜I am by myself.＞という英語表現は、興味深い表現だと思います。あるいは、僕には、この表現に、ある優しさが感じられます。なぜなら、孤独ではあるけれども、既に自己は、I と myself に分裂しているからです。自己同一性という拘束状態の殻だけは既にひびわれているようです。

(補) 英文読解の実際

本文の主要な目的は、英文法を理解し使えるようになることではなく、英文法や構文の手前でたちどまり、言語そのものについて再考することです。英文法というのは、義務教育でほとんどすべての日本人が接するものであるもので、言語について考えるテキストとしてよいものだと考えます。

しかし、たとえば、テストで数学の問題を解いているとき、朝すれちがった女の子のことや、今日の昼ごはんをどこでたべようかとか、数学の学習の意義とはなにかとか、考えている間は、数学の問題は絶対とけません。本文中の言い方でいえば、数学の問題を解いている間、<私>は、数学の問題に吸収されてしまって一時的に消えるし、またそのくらいでなくては、数学の問題の面白さはわからないのでしょう。

そこで、ここでは、実際に英語を読んでいくのに重要な、構文分析の実際についてふれようと思います。英語を構文で読むということは、頭を整理すること以上に、<うしろにもどらず英語を頭から読んでいく>入り口になると考えます。

ただ、英語をよむとき、構文で考えるということは、ここでのオリジナルではありません。いろいろなところで提唱され実践されていることです。

ですから、この章は、英語を受験等でマスターする必要のある人以外には、不要と考えられるし、既に、構文分析の重要性を知っている人にとっては目新しさはないでしょう。実際、ぼく自身は英語の教師ではなく、昔、教えていただいた諸先生方からその方法を学んだだけのことです。ただ、その方法に、かならずしも最初から出会えたわけではない。だから、英語の勉強中で、まだ<出会ってない方>にとっては、意味ある章になると思います。

一般のみなさんは、本文中の文章と、この章の文章とのへだたりにびっくりされるかもしれません。また、いままでかいていたことが、実際の英文読解に少しもいかされてないことに不満をもたれるかもしれません。実際の英文読解は、ずっと機械的におこなわれますから。

少少こじつけでいえば、この章を読むことで、ぼくの考える<存在論的英文法論>というのが、英文法を身につけるための道具、方法論ではないということが、わかっていただけると思います。つまり、どんなに、英語が自由にあやつれても、どんなに仕事ができても、みることのできないものがある・・・・その隙間をすこしでもあきらかにしたいというのが、本文での意図です。そして、もちろん、このように言語表現によって隠れていたものをあきらかにしたとたん、その言語表現そのものが、やはりまたなにかを隠蔽してしまうというジレンマはいうまでもありません。

＜例文＞

極論すれば、英語とは＜S+V+X＞です。

Xがなかったり、ふたつあったり・・・つまり、Xの種類により、5つの文型に分類されます。例文をみてみましょう。

Of all the wonderful and uniquely human characteristic of man, his ability to communicate through the use of language is perhaps the most important. While it is true that man can communicate in many nonlanguage ways, you can imagine how limited his ability to communicate would be without language.

Without language, man would communicate only simple thoughts, ideas and experiences. But with language, he can talk to other men and he can put his talk into writing for men to read. By these means, he can make known to others all of his thoughts, ideas, feelings, and experiences.

(Of all the wonderful and uniquely human characteristic of man,) his ability (to communicate through the use of language) **is** (perhaps)the most important.

この最初の文章はS+V+Xで第二文型です。His ability is important.　が基本で、あとは様々な修飾（M,）がついています。(Of all the wonderful and uniquely human characteristic of man,) (perhaps)は、動詞 **is** に対するM（副詞）です。his ability (to communicate through the use of language)のto以下は、主語＝名詞 his ability に対するM（形容詞）です。

While it **is** true　(that man can communicate in many nonlanguage ways)，you **can imagine** how limited his ability to communicate would be　(without language)　.

これは、While　S+V+X、S+V+X．という形です。While　S+V+X、は第二文型です。後半のS+V+X．は第三文型です。ここでのX＝how limited his ability to communicate **would be**　(without language)　は間接疑問とよばれてますが、全体としては名詞です。名詞となった、もとの文章は、第二文型です。すなわち、S‘＝his ability（ to communicate）:（ to communicate）は、名詞 his ability に対するM(形容詞)です。V’＝would be : without language）がこのV‘に対するM（副詞）です。X‘＝how limited です。つまり、この文章の骨格は、While　S+V+X、S+V+（S’+V‘+X’）です。こ

こで（S’+V‘+X’）＝Xになっています。

（Without language, ）man **would communicate** （only） simple thoughts, ideas and experiences.

これは、第三文型です。(Without language, ）は、V＝would communicate を修飾するM(副詞)で、S＝man。X＝（only） simple thoughts, ideas and experiences.。Xの中心は、thoughts, ideas and experiences という名詞で、これに対して simple という形容詞がMとなっています。(only) は、名詞 thoughts, ideas and experiences に対するMではなく、Mである simple（形容詞）に対するM（副詞）です。

（But） （with language）, he **can talk** （to other men） and he **can put** his talk（ into writing for men to read）.

これは、S+V（第一文型）、and S+V+X（第三文型）。最初の第一文型のS＝he, V=can talk.。(with language)（to other men）は、Vに対するM（副詞）です。後半の第二文型。S＝he, V=can put。X＝his talk（名詞）で、（ into writing for men to read）はVに対するM(副詞)と考えましょう。もちろん、put…into…とひとまとまとめに考えてもよいですが。for men, to read はいずれも、このMのなかの動詞 writing に対するM（副詞）と考えてみましょう。もちろん、for men to read をひとつずきに考え、動詞 writing に対するM:=to read の主語が、for men の men だというとり方もよいでしょう。

（By these means,） he **can make** known（to others） all of his thoughts, ideas, feelings, and experiences.

このS+V+Xは第五文型です。第五文型の特徴は、Xの中に、S‘、V’、X‘がひそんでいるということです。
この文章は

He **can make** （all of his thoughts, ideas, feelings, and experiences） （known （to others））と後半部分の順番をかえて考えます。（もともとは all of his thoughts, ideas, feelings, and experiences.が大きすぎるので、例文のような順番になってしまったのです）（all of his thoughts, ideas, feelings, and experiences）はXの中のS‘です。(known （to others））はXの中のV’ です。つまり、All of his thoughts, ideas, feelings, and experiences(is)known （to others）という文章が、X内部に隠れており、このようなXをVのあとにもつ文章が第五文型というわけです。

＜英文法の整理＞

（1）　英語の５つの型

S+V+X（あとはM）：Xの性質により、５つの型になる。

文型外　There is X.

第一文型　S+VでXがない。

例　I walk.

I talk.

* I　go (to school).も第一文型と考えられる。(to school)は、方向をしめす副詞で、go を修飾するMととる。

第二文型　S+V+Xで　S＝X

例　I am fine (I=fine).

I feel well(I=well)

His name is John. (His name=John)

Xは、名詞、または形容詞。

ただし、場合によっては、主語の状態場所をしめす、副詞がくることもある。

例　I am late.

He is in her house.

第三文型　S+V+Xで、Xは直接目的語とよばれる名詞

例　I have an apple.

I make a cake.

*英語では、間接目的語が単独でXの位置にくることはない。

第四文型　S+V+X1、X2で、X1は間接目的語、X2は直接目的語

例　I give him a book.

が典型だが、以下のように前置詞をとることがある。

例　I informed him of it.

I derived him all his money.

第五文型　S+V+Xで、Xの中に第一文型から第四文型までの文章（S‘+V’+X‘）

が隠れている。

知覚、使役動詞はここに含まれる。そうでないのもある。

例　I make you happy. (You are happy.=第二文型)

I keep my hair long. (My hair is long.=第二文型)

I have my shoes repaired. (My shoes are repaired.=第三文型の受身)

I saw him running. (He was running.=第一文型)

I want you to go to school. (You go to school.=第一文型)

*to 不定詞がこの場合必要なことに注意。

He asks her to make a cake. (You make a　cake.=第三文型)

*to 不定詞がこの場合必要なことに注意。

(2)　品詞について

V（動詞）

現在形、助動詞

例　He goes to school.

I can drink

*注意！現在形は、現在のことではない。

時制

例　I have been to Paris.

I am running.

仮定法

例　She coud have been happy.

*これらは、形が変化しても、ひとまとまりでVと考える。

S、Xの大部分は名詞

名詞の作り方

－冠詞+名詞　例 a book, the apple

－名詞　例 people

－...ing　例　I like cooking.

－to 不定詞　例　To be or not to be, that is a question.

－that S'+V'+X'

例　I know (that he is dead.)

*同格の that に注意

－間接疑問: S'+V'+X'がそこにある。

例　I don't know (if he is alive).

I don't mind(how <u>she feels</u>.)　what,where

－関係代名詞 what=the thing which

例　I don't understand (what <u>he has done</u>.)

－to 不定詞　something to drink

M（修飾語）

(1)　形容詞：(名詞の前で) 名詞を修飾、または第二文型のXとして主語の説明。

形容詞の作り方

－a happy man

－関係代名詞

例　I know **the doctor** (whose father is a doctor.)

*(whose father is a doctor.)が **the doctor** を修飾。

I don't want **the present(** which is bought at store.)

***(** which is bought at store.)が **the present** を修飾。

－....ing, ...ed

例　I like **a cake** (baked by my mother.)

I saw **a boy** (riding on a motorbike.)

(2)　副詞：動詞または形容詞の修飾

*特殊例として、第二文型のXにはいることがある。

副詞の作り方

－単独　there, here, home, maybe. Already, quickly,　etc

－前置詞+名詞　in his pocket, on the table,　etc.

－副詞節

例　because S'+V'+X'

although S'+X'+V'　　etc.

－to 不定詞　　例　I eat to live

－分詞構文（....ing, ...ed）

例　(Surprised,) I didn't say anything.

*この場合、Being surprised の Being の省略と考える。

＜課題＞

なお、ぼく自身、まだいくつかの疑問点を残していますので、ここにあきらかにして、皆様からの意見をうかがえればと思います。

(1)　受身

This cake is made by my mother.

これを 1-5 の文型に分類するのにどうしたらよいでしょうか？
この文章を能動形にもどした、My mother makes the cake.を考え、第三文型とするか、それとも、be 動詞をそのまま素直にかんがえ、第二文型とするか？
今のところ、すこし煩雑ですが、前者とかんがえているのですが。

(2) 成句

I go to school.は、これを、I **go** （to school）で（to school）をMとして第一文型としましたが、I （**go to** ）school と go to 全体をV，school をXとすることはできないでしょうか？
いまのところ、これは成句によって、それぞれあたっていくしかないと考えてます。
I go to school.のときはまよいますが、I wake up late in the morning. のときは、wake up はあきらかにひとまとまりといえます。